

昨日12日の木曜日から、いよいよ新しい企画展示が始まりました！「むかしの教科書～寺子屋から学校へ」というテーマで、市民図書館7階廊下と8階入口において、歴史資料室が所蔵する江戸時代から明治時代までの教科書を展示・解説しています。

まず、7階廊下と8階展示ケースには寺子屋の教科書としてよく使われた本を展示しています。その中のひとつに「新編<sup>じんこうき</sup> 塵劫記」(刊行年不明)という算術の本があります。これは、江戸時代にたいへん普及したそろばんのマニュアル「塵劫記」(1627年初版 吉田光由著)を改版したものです。そろばん問題のほかに面積や距離を測るといった実用的な問題や、「継子立て」「ねずみ算」「入子算」「からす算」といった頭の体操的な問題も載っており、昔の算数好きな子どもたちは楽しんで取り組んだのでしょよね。問題・解き方・答ともアラビア数字(算用数字)ではなく漢数字を使って縦書きで書かれており、添えられた木版の絵もなかなか面白いので、ぜひご覧いただきたいと思います。



からす算(「新編 塵劫記」歴史資料室蔵)



入子算(「新編 塵劫記」歴史資料室蔵)

江戸時代には、この「塵劫記」のほかにも多くの算術の本がつくられ「和算」という日本独特の数学が発達しました。それは独自の用語や記号によって表され、西洋数学にも見劣りしない優れたものでしたが、明治時代以降の学校教育では西洋数学を学ぶことになり、次第に忘れられるようになってしまいました。

そこで、今回のトリビアでは、「新編 塵劫記」に載っている和算の問題のひとつ「ねずみ算」を現代文に訳してご紹介します。

「正月に、ねずみの父母があらわれて子を12匹産み、親と合わせて14匹になりました。このねずみは、2月に子ねずみがまた子を12匹ずつ産むので、親と合わせて98匹になります。この様に、月に一度ずつ、親も子も孫もひ孫も月々に12匹ずつ産む時、12ヶ月でどれくらいになるでしょうか」

さあ、答えは何匹でしょうか？ ねずみ算という言葉はよく聞きますが…。この答は来週お知らせします！

では、今年も歴史資料室をどうぞよろしく願いいたします。

追伸：図書館8階に「むかしの教科書」に関する図書も展示しています（貸出可）。私のおすすめは『算法少女』（遠藤寛子著 請求番号 YB エン）です。少年少女向け歴史小説ですが、実在する「算法少女」という和算書をモチーフに、江戸時代の女の子が生き生きと算法を学ぶ姿を描いた大人にも読み応えのあるお話です。